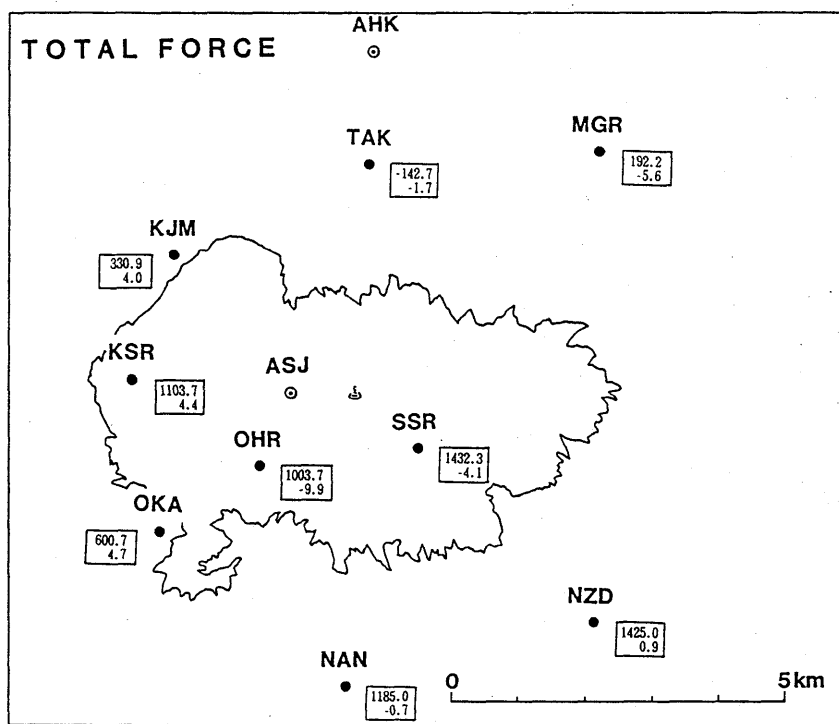


阿蘇山における地磁気観測(VI)*

気象庁地磁気観測所

地磁気観測所(鹿屋)は、1979年3月より阿蘇山上(ASJ)、阿蘇山麓(AHK)の2地点で全磁力連続観測及び地磁気3成分の移動観測を、また、阿蘇カルデラ内の9点で年2回の全磁力移動観測を、そのうち4点では地磁気3成分の移動観測を合せて行っている。これらの観測結果については、1983年6月分までは既に報告した。^{1)~5)}今回は、1984年8月までの結果を中心に報告する。

第1図に、全磁力連続観測点(2点)及び地磁気移動観測点(9点)の位置を示す。図では、1984年5月における各観測点の全磁力の鹿屋との差(上段)、及びその1984年4月における観測点との差(下段)も合せて示している。

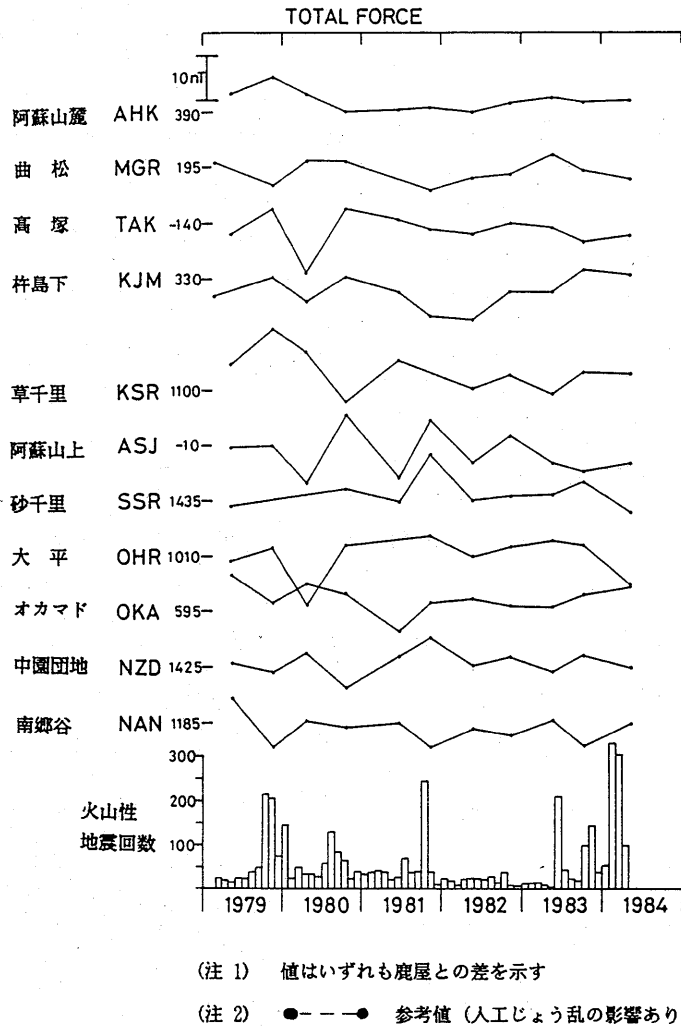


第1図 全磁力連続観測点(⊙)および地磁気移動観測点(●)の分布と全磁力移動観測結果 内の上段は1984年5月における全磁力の鹿屋との差、下段は1983年4月における観測値との差を示す。

Fig.1 Location of continuous measurement stations (⊙) and observation points (●) and results of observation for the total-force intensities.

* Received Jan. 12, 1985

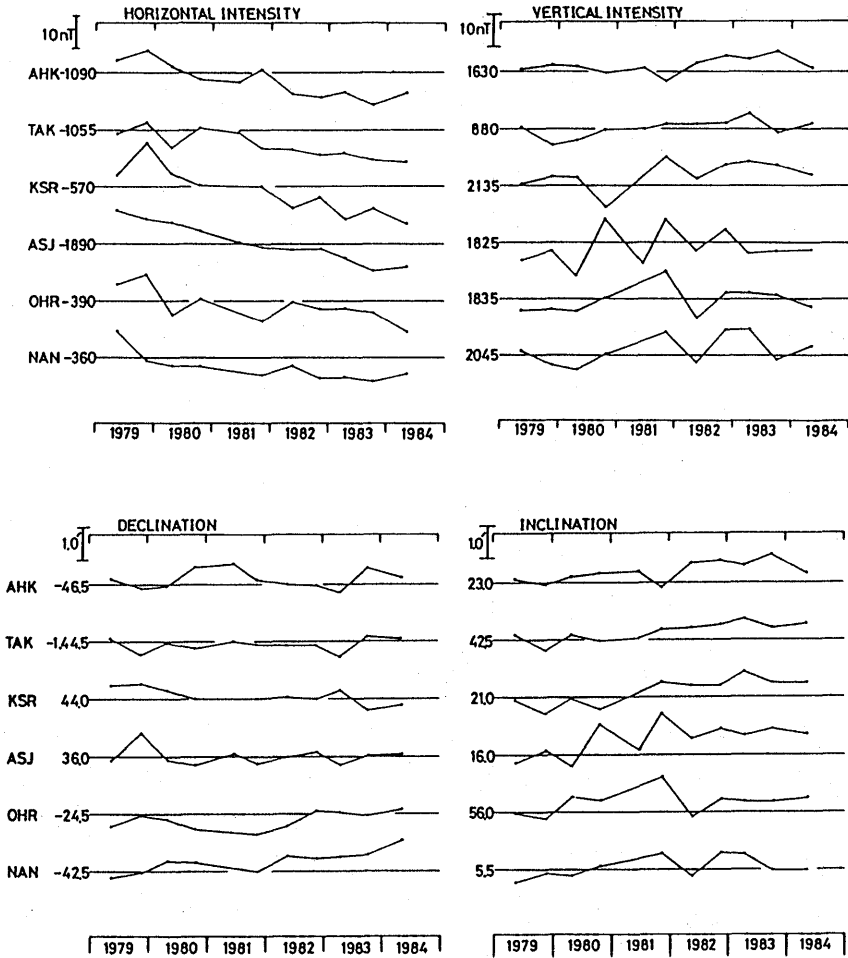
第2図では、1979年3月～1984年5月の期間について、各観測点における全磁力の鹿屋との差の時間変化を示した。第2図において、1981年ごろまで続いていた全磁力差の減少傾向が落ちつき、1984年現在ではやや増加の傾向にあるのが読みとれる。



第2図 地磁気移動観測結果(全磁力)

Fig.2 Results of geomagnetic observation (total-force)

地磁気各成分（水平分力，鉛直分力，偏角，伏角）の各観測点における値と鹿屋との差の時間変化については，1979年3月～1984年5月の期間を第3図に示した。阿蘇山上（ASJ）においては，水平分力の単調な減少がなお続き，鉛直分力，伏角の大振幅の変動は1983年秋から見られなくなった。これが，火山活動に関連すると判断するには，現在火山活動が平穏であるので難しい。今後の推移を見守ってきたい。



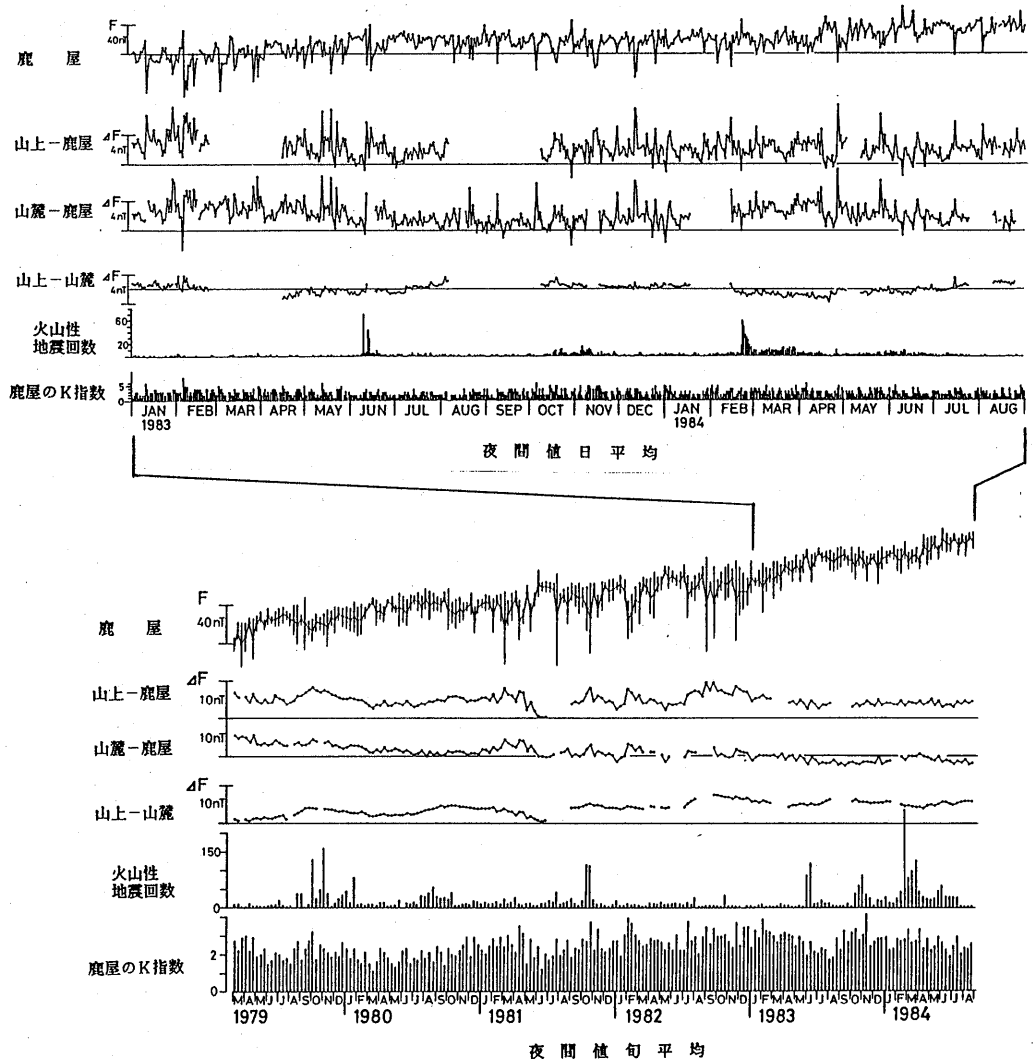
(注 1) 値はいずれも鹿屋との差を示す

(注 2) ●---● 参考値 (人工じょう乱の影響あり)

第 3 図 地磁気移動観測結果 (成分)

Fig. 3 Results of geomagnetic observation (component)

第4図は、1983年1月～1984年8月までの期間の阿蘇山上(ASJ)、阿蘇山麓(AHK)における夜間値(0～2時)の全磁力差の日々の変動と、1979年3月～1984年8月までの期間について旬平均でみた変動を示す。1984年現在、特に目立った現象は見られていない。



第4図 鹿屋における全磁力夜間値および鹿屋、阿蘇山上、阿蘇山麓における全磁力夜間値相互差の日変化と旬平均値

Fig. 4 Day to day changes of nighttime total-force intensities at Kanoya and difference of the intensities between the two stations for Kanoya, Asosanjo and Asosanroku, and the ten days means of those.

参 考 文 献

- 1) 地磁気観測所(1979) : 阿蘇山における地磁気観測(I), 噴火予知連絡会会報, **16**, 29-32.
- 2) 同 上 (1980) : 同上(II), 同上, **19**, 21-27.
- 3) 同 上 (1981) : 同上(III), 同上, **23**, 28-30.
- 4) 同 上 (1982) : 同上(IV), 同上, **26**, 44-46.
- 5) 同 上 (1983) : 同上(V), 同上, **29**, 49-53.
- 6) 河村 謹・永野哲郎・加藤 誼司・馬場広成・仲谷 清・行武 毅・吉野登志男・歌田久司・田中良和
・増田秀晴(1980) : 桜島およびその周辺地域における地磁気測定, 第3回桜島火山の集中総合観測報告, 41-54.